



抱負を述べる木下真生新会長

### 木下新会長、決意を語る 日本塗装機械工業会

去る6月22日に開催された日本塗装機械工業会 (CEMA) の第36回総会において、第7代目の会長に選任されたランズバーグ・インダストリー(株)代表取締役木下真生氏に、新任の抱負と心意気についてインタビューをする機会に恵まれた。その要約を次に紹介する。

——CEMAの新会長に就任されて間もないのですが、まず、引け受けられた経緯をお聞かせ下さい。

木下 前任の里見さんが一期2年を目途(めど)にやられていたので、次を誰(だれ)かが受け継がないといけない。お話をいただいた時、私も一期2年という期限付きならば、約15年間お世話になったこの業界に、少しでもご恩返しができるかもしれないと、引き受けることにしました。

——一期2年という短いような長いような感じが致しますが、まず、何から始められますか。

木下 この業界でのCEMAの存在感を示せるような良い方向に持って行きたい。われわれの存在意義の基本は、広義の塗装産業の振興と技術革新を図っていくこと。また、出荷統計のよりいっそうの充実と政策の受け皿としての環境対策、たとえばVOCの削減に取り組むというようなことです。運営に当たっては分科会の活発化です。設備部会・機器部会・技術部会の三部会がありますが、若い有望な人たちがそろって協力的で積極性がありますし、要望があれば新しい部会を立ち上げてもいい。

——6月の総会での就任あいさつで、会員を増やすというお話でしたが。

木下 やはり、数は力なりですよ。現在、会員数が26社、いろんな意味でパワーがちょっと不足気味ですね。ほかの業界団体では、たとえば工業塗装では日本工業塗装協同組合連合会、塗料は日本塗料工業会、建築塗装の日本塗装工業会等々、相当数の会員と明確なキーワードというか冠を持っている。CEMAにはほかの団体さんのような明確なキーワードがない代わりに“塗装”という非常に大きな冠がある。いろいろな業種の人々が広く集まっているし、集まれるのではないかと考えたんです。CEMAのそういう性格を最大限に活用して、たとえば、塗装機器をつくっている製造過程に関与する会社だっって入っていいじゃないかと。何も完成品をつくっている会社だけじゃなくても、コンポーネンツをつくっている会社も会員になってもいいですよ。

その前に、正会員のほかに賛助会員というのがありますが、このハードルがすごく高い。正会員と賛助会員で何が違うかっていうと、総会での議決権があるかないかですが、それで会費もほとんど変わらない。そこで正会員を中核に、後はもうバーを下げた形での賛助会員でワットと周辺から活性化を図っていくとかすれば、会員も賛助会員も皆で頑張ろうと盛り上がってくる。だから、目標50社の賛助会員！ 時間はかかると思いますが、それでもすでに25社ほどの新規賛助会員登録があがっています。

うちの昔からの協力会社で、従業員10人もいない中小企業の社長さんに、「CEMAには、うちみたいな会社は会員にはなれないでしょ」と言われた。そこで、「いや、そんなことはないですよ。CEMAは広義の塗装という大きな傘を持っているのですから、社長のところも入れますよ」と。それと海外のマレーシア、タイなどの会社にも声をかけているところです。グローバルCEMAです。

せっかく、先達の皆さんがCEMAを立ち上げ長く輝かしい歴史を築いてきたのですから、その功績には感謝しつつ会員になって得るところがあって良かった、CEMAに参加して良かったと思われるようにしたいですね。